



38



猫のフィラリア 予防の重要性

執筆者・岡谷動物病院 佐々木厚さん

犬と大きく異なる 症状、診断、治療

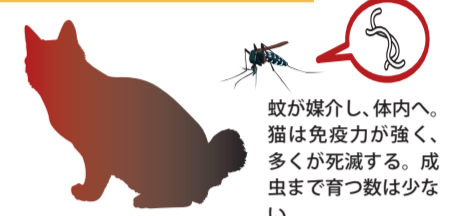
はじめに

猫のフィラリア症は、犬の感染率の10%であるといわれています。諏訪地方の犬の感染率の高さと予防の低さから考えると、極めて感染率は高く重要な猫の寄生虫感染症と言わざるを得ません。

犬との違い

せき、呼吸困難、呼吸数増加、嘔吐(おうと)の猫が来たら、猫フィラリア症も必ず疑って検査することが標準的診断になっています。しかし、犬と同じ寄生虫から発生する疾

猫のフィラリア症



- 第1病期** 未成熟虫が肺動脈に到達した直後に免疫作用を受けて死滅、急性炎症を起こす(犬糸状虫に伴う呼吸器疾患)
 - せき 呼吸困難 嘔吐
- 第2病期** 成虫になったフィラリアが肺血管内で死滅、重度の炎症と血栓塞栓症を起こす
 - 急性肺障害 突然死
- 第3病期** 肺が病変、慢性呼吸器疾患に

診断

猫の診断は非常に困難です。必ず行うべき検査に身体検査、胸部レントゲン検査、心臓超音波検査、抗体検査、抗原検査があります。しかし画像検査の読影には経験と熟練が必要であり、高性能の超音波検査機が必須です。鑑別診断リストに「猫のフィラリア症」という項目がなければ100%診断できず、誤診をすることになります。更にHARRDにおいては、未成熟虫が死滅することによって発症することから、心臓超音波での診断は不可

治療

治療はステアロイド、ロイコトリエン拮抗剤、気管支拡張剤、酸素吸入などによる支持療法が中心になります。シヨックの場合は抗シヨック療法を行います。まれではあります。緊急の大静脈症候群を起こした場合は、頸静脈からアリゲーター鉗子(かんし)やストリンクブラシを挿入し、虫体を摘出する方法が取られます。

投薬で確実な予防を

診断が難しく突然死のリスクも

予防

予防に関しては、診断が非常に困難であることと、せき、呼吸困難、嘔吐という非常に多くの鑑別診断リストの中の特異的でない症状であり、心臓病や腎臓病、肝臓病、脾臓(すいぞう)病、炎症(すいぞう)病、潰瘍、アレルギー、免疫、腫瘍、肉芽腫、ホルモン異常、呼吸器疾患など膨大な原因の中に猫フィラリア症が入ってくることにあります。当院では25年間で20例の猫フィラリア症の確定診断を行いました。費用もかかります。

最後に

猫のフィラリア症は、確実に多く存在し、その診断は困難で多くの例で誤診されている重要な疾患です。一番大切なことは、犬猫の

世界標準のガイドラインに記載されているのと同じです。「確実な予防をきちんとやることが分れば、せき、呼吸困難、嘔吐で来院してもフィラリア症の検査が必要なく、診断も非常に楽になり、猫さんにとっても飼い主さんにとっても、獣医師にとってもとてもいい結果を生むこととなります。また、感染猫においても更なる感染を予防するために投薬が推奨されており、安全・確実に予防ができます。

猫さん、飼い主さん、獣医師のみんなに利益をもたらす、無駄な検査にお金をかけないで幸せな生活を営むために、安全・確実に予防をしてあげてください。最良の主治医は獣医師ではありません。きちんと勉強した意識の高い飼い主こそが、最良の主治医です。【次回は8月26日に掲載予定です】

このコーナーへのご意見、ご感想をお寄せ下さい！
 ご意見、ご感想、岡谷動物病院の佐々木先生に聞いてみたいことなどをお寄せ下さい。住所、名前、電話番号を明記し、郵送(〒394-0028岡谷市本町3の8の30)、ファクス(0266・22・4444)、Eメール(mail@shimin.co.jp)のいずれかで、市民新聞グループ編集局「見る」係へお送りください。
 バックナンバーは岡谷動物病院ホームページでご覧いただけます。